

幼児による遊び場の環境構成に関する研究

多田 幸子

要 旨

本研究では、保育室内にある特定の場所におけるこどもの遊びを観察し、彼らが自分たちの遊びに必要な物理的環境を構成するため、具体的に何をし得るのかを調べた。観察の結果、年中児・年長児は遊びに必要な環境をつくるために、物の配置を変えたり、新たな物を持ち込んだり、組み合わせや変形によって新たな物を作ったりしていた。その一方で、こどもたちは活動に不要な物を取り除こうとはしなかった。また、そういった行為の対象となるのは、大きさや重さの点で、彼らが自分たちの力で扱える範囲にある具体物であった。以上の結果から、こどもは自分たちの活動に相応しい遊び場をつくるため、操作可能な物に働きかけて、その物理的環境を複雑化させるようであった。

キーワード：幼児 遊び場 物理的環境 環境構成

研究の背景と目的

こどもは発達早期から感覚器官を能動的に働かせて、自己を取り巻くさまざまな物に空間行動を示す。三島・山下（1995）によれば、こどもは両眼での三次元的視知覚が優位になる生後5ヶ月前後に、意図的に見た物へと手を伸ばして触れたり掴もうとしたりするようになる。そして、生後8ヶ月頃には知覚外に消え去った物への手による能動的探索を見せるようになるという。さらには、Huttenlocher & Vasilyeva（2003）によると1歳6ヶ月頃になれば、一度分からなくなった物の隠し場所を自己の身体以外の手がかりを利用して探し出すようになるという。

こういった物理的対象への行動は、こどもの中に早期から、環境についての認識の構成を促し（Butterworth & Harris, 1994/1997）、自分を取り巻く外界を意味ある世界（汐見・村上・松永・保坂・志村, 2012）とみなせるようになることに寄与するにするとする。これはつまり、物理的経験やそれをコントロールする経験（北浦, 1999）の中で、こどもが認知的に発達することを示唆している。この示唆をふまれば、

物理的環境はこどもが健やかに育つための重要な役割を担うものであるといえよう。

保育現場では、従来からこの物理的環境に注目し、多様な経験（砂上, 2007）をこどもにもたらす環境をいかに構成していくかという問いに取り組んできた。屋内、特に保育室内に関しては、こどもの活動の拠点（赤坂, 2014）であることから実践に関わる様々な検討が行われている。

例えば、山田（2012）は、こどもの絵本読みという活動の展開の程度が、絵本コーナー内に含まれる家具や、こども自身の位置関係をフレキシブルに変えられるかどうかによって左右されることを示唆した。また、汐見ら（2012）は、乳児保育室内の間仕切りや家具などの配置が、こどもの示す移動経路や活動への集中の度合いに影響することを示した。さらに、渡辺（2012）は、縦割り保育の実践記録を振り返る中で、個の特性を活かす空間条件として、緩やかな隔離が可能であることの重要性を指摘した。

以上のような研究報告からは、保育現場における物理的環境の状態がこどものさまざまな空間行動の展開の程度と密接に関連していること

（所 属）

山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

を推察できる。また、こどもがどんなものと出会って、新たな活動を発見し、発展させていくか（無藤，2012）は、彼らが置かれた環境に左右されるということであれば、その保育現場の環境の構成に深くかかわる保育者は、重要な責任を負う存在であるといえよう。

しかし、保育現場における環境づくりの担い手は保育者だけではない。こども自身が必要だと思うもの、もっとこうしたいと思う中で環境を作り上げていくことが必要とされている（植原，2012）。つまり、こどももまた保育現場における環境の構成・再構成の主体であると認識することが、環境を通しての保育（無藤，2012）を可能にするといえるであろう。

こどもが自ら身を置く保育の現場の中で必要に応じて物理的環境に働きかけをし、その環境を変化させる姿については、保育実践の事例の中で取り上げられ、考察されている。特に、実践の現場では、自由保育時の遊び場（play space）におけるこどもの様子に注目して事例が集められるようである。

塩・新澤・小林（2001）では、自由遊び場面において遊びの場を自分たちで作れることでその遊びに対する楽しさが増すとした。そして、こどもたちが自分でじゅうたんを敷き、テーブルとイスままごと道具を運んで、遊びに必要な環境づくりをする事例を示し、ある場所から別の場所へ移動させないまでも、こどもが自由に動かせる間仕切りの設置がこどもの活動の展開に寄与する可能性を示唆した。

また、宮原（2012）は、こどもが自ら活動に必要な環境づくりをする際にはさまざまな材料が必要とされ、また、隙間が多く、あまり整理整頓されていないような場所を提供する方がこどもの助けになると指摘した。そのうえで、こどもは主体性を発揮して見つけたり、つくったりした空間に潜り込むのは格別に楽しいと思うようであると考察している。

こういった実践例からは、自分たちの遊び場の物理的環境を作り上げることは、幼児期のこどもにとっては、その遊びへの動機づけや期待

を高め、また遊びに対する満足度も高めうる行為であることがうかがえる。そして、そのようなこどもが自ら遊びに必要な環境を構成しようとする姿に目を向け、彼らの試みをより詳細に検討することによって得られる知見は、保育実践の向上につながるような新たな発達の知見となり得ることが期待される。

しかしながら、これまでの報告では、こどもと物理的環境のやり取りに注目しているものの、個別のエピソードを紹介することに重点が置かれており、こどもが自分たちの遊びに必要な環境を構成するために成した行為の詳細な分析には至っていない。

以上をふまえて本研究では、こどもにおける遊び場の物理的環境を構成する試みに焦点を当て、遊びに必要な環境をつくる際の具体的な行為にどのようなものがあり、またそれらの行為にはどのような特徴が見出されるのかを調べることとした。そこで、保育現場において観察を実施し、実際のこどもの遊びの事例を収集することにより、事例中に認められる遊び場の環境を構成する行為を分類し、分析していくこととした。

方法

対象者 K 県の私立幼稚園 1 園の在籍児で年中児（男 17 名，女 19 名，平均月齢 64 ヶ月）、年長児（男 20 名，女 21 名，平均月齢 75 ヶ月）であった。

期間と頻度 平成 24 年 11 月から平成 25 年 1 月の 3 ヶ月を観察期間とした。さらに、観察は、毎週 1 回の頻度で火曜日の 7:30-10:30 に行った。

観察場所 こどもの活動の拠点（赤坂，2014）である保育室内で観察を実施した。さらに、観察の範囲を絞り込むため仙田（1995）を参照したところ、幼児の施設中における遊びは滞留行動の中で生起し、その滞留行動自体は、特定の空間に集中して起こることであった。これをふまえ、本研究では、仙田（1995）において最も多量の滞留行動が見られた他の部分から差

別化されている空間、すなわち別所に焦点を当てた。そして、研究協力園でこどもが制約なくアクセス可能な別所である「おうち」と、プレイマット上の「つみきコーナー」を観察場所とし、この2箇所を遊び場として生起する活動を記録した。

おうちは、保育室内にある家を模した木造の遊具であった。各保育室に作り付けられており、1階部分と2階部分から構成されていた。Figure 1-aのように、1階部分付近には移動可能な棚と間仕切りが配置され、それらによって囲まれている範囲はおうちの1階部分の延長として捉えられていた。なお、棚の中には、食器などの生活用品を模したおもちゃが入っていた。

つみきコーナーは、各保育室の中にあるジョイント式のプレイマットが敷かれた一区画であった (Figure 1-bを参照)。コーナーの側には木製の棚があり、そこに積み木、ブロック、プラレールなどのセットが内容ごとに木箱に入った状態で収納されていた。

手続き 本研究における観察は非参与型で実施した。観察日には、7:30の開始時刻前に記録機材の設置を済ませておき、自由遊び時間になるとともに観察・記録を始め、この間に調査者の動きがこどもの活動の妨げとならないよう注意した。10:30の終了時には、設置した機材などをすみやかに撤去し、一斉保育時間に影響がないよう努めた。各場所における各年齢群の記録はフィールドノートにまとめ、おおよそ一ヶ

月ごとに画像記録のデータと共に園にフィードバックし、調査実施状況と記載内容の確認を求めた。

記録 本研究の観察では、研究協力園に目的・内容を説明し許可を得た上で、年中児に対しては筆記記録およびカメラでの写真による記録を行い、年長児に対しては保育室内に固定設置したビデオカメラによる記録を行った。

材料 本調査では、ビデオカメラ1台、三脚1台とカメラ1台、筆記記録に必要な用紙、筆記用具を使用した。

結果

観察された遊びについて まず、全11回の観察において、おうちとつみきコーナーのそれぞれにこどもが滞留している中で確認された遊びの事例数をカウントした。参加者が各遊び場を訪れた時を遊びの開始時点とし、参加者全員がその場から10分以上離れた時、または、参加者がその場に居続けていても別の内容の遊びを始める意思を言語などで明示した時、使用していた道具・玩具等を開始時点の状態に戻した時を終了時点とした。事例数のカウントにあたって、2名の評定者が記録をもとに独立に事例を抽出し、後ほどその結果を照合して、判断にずれや不一致があった場合は両名による再確認と協議を経て決定をなした。その結果、おうちにおける遊びは年中で15事例、年長で3事例が認められ、つみきコーナーにおける遊びは年中で10事

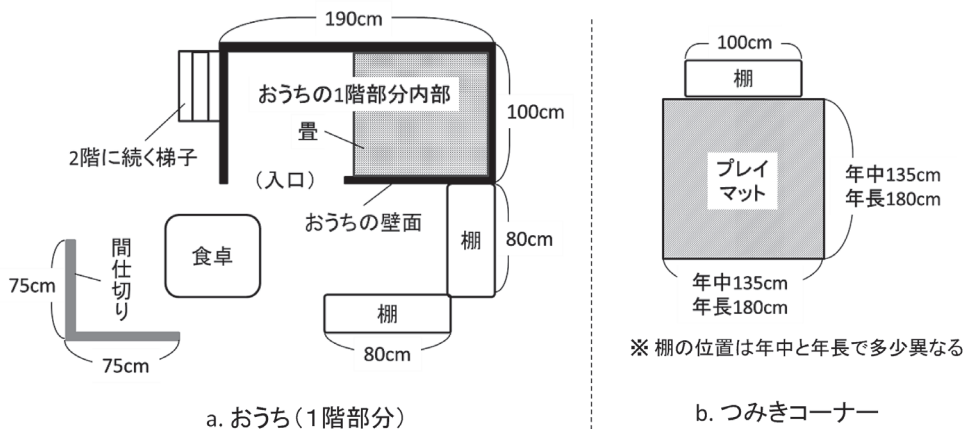


Figure 1 本研究において調査場所となったおうちとつみきコーナーの様子

例, 年長で 15 事例が認められた。

上述をふまえ, 続いて, おうちとつみきコーナーにおいて認められた遊びを内容別に分類するために, 仙田 (1995), 塩ら (2001), 森上・柏女 (2013) などを参照し, 幼児期のこどもが施設内で特定の場に滞留しているときに生起する遊びのチェックリストを作成した。リストは全部で 10 項目から成り, 具体的な項目は, 何かになりきったり役割実現したりする「ごっこ・ふり遊び」, 物を組み立てたり形象を作ったりする「構成遊び」, 役割を決めて逃避・追跡を行う「鬼遊び」, 相手と組打ちして争う「格闘遊び」, 自分の能力を試す「挑戦的遊び」, 独特の身体感覚を楽しむ「めま이의遊び」, 自分の描きたい絵を描く「描画」, 自分の好む絵本を味わう「絵本読み」, 相手と話すことのみで専念する「会話」, 以上のいずれにも該当しない「その他」であった。

作成したリストをもとに, おうちとつみきコーナーでのこどもの遊びの事例を分類する際には, 先述の 2 名の評定者が独立に分類作業を行い, 加えて, 両者の判断の単純一致度を算出し, その値が .75 を上回る信頼性を示すかを確かめた (南, 1993)。なお, 評定者間で判断が分かれた事例は, 両名による再確認と協議を経て分類し

なおした。

その結果, おうちでの遊びは, 年中の 15 事例のうち 13 事例 (86.7%) がごっこ・ふり遊び, 1 事例 (6.6%) が会話, 1 事例 (6.6%) がその他 (調査者に対するからかい) であり, 続いて, 年長の 3 事例はすべてごっこ・ふり遊びであった (100%)。このとき, 2 名の評定者による分類の一致度は .83 であり, 基準値を上回っていた。次に, つみきコーナーでの遊びについて見てみると, 年中の 10 事例のうち 8 事例 (80.0%) が積み木を用いた構成遊び, 2 事例 (20.0%) が人形を用いたごっこ・ふり遊びであり, 続いて, 年長の 15 事例はすべてごっこ・ふり遊びであった (100%)。このとき, 2 名の評定者による分類の一致度は .80 であり, 基準値を上回っていた。なお, それぞれの遊び場における各年齢群の事例の中に, 鬼遊び・格闘遊び・挑戦的遊び・めま이의遊び・描画・絵本読みの 6 つに分類されるものは認められなかった。

物理的環境を構成する行為について おうちとつみきコーナーにおいて, 特定の遊びを行うために各場所の物理的状況を変化させる行為を含む事例が, どの程度認められるかを調べた。各遊び場における物理的状況の変化を, 場所内

Table 1 遊びに必要な物理的環境を構成するための具体的行為とその行為が認められた事例

場所	年齢群	遊びの内容 [事例数]	行為カテゴリ			
			新たに 持ち込む	新たな物を作る		配置変更 する
				組み合わせる	変更させる	
おうち	年中	ごっこ・ ふり遊び [13事例]	8 (0.62)	5 (0.38)	2 (0.13)	13 (1.00)
		会 話 [1 事例]	1 (1.00)	1 (1.00)	0 (0.00)	1 (1.00)
		その他 [1 事例]	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	年長	ごっこ・ ふり遊び [3 事例]	1 (0.33)	0 (0.00)	0 (0.00)	3 (1.00)
つみき コーナー	年中	構成遊び [8 事例]	0 (0.00)	1 (0.13)	1 (0.13)	7 (0.88)
		ごっこ・ ふり遊び [3 事例]	0 (0.00)	1 (0.30)	0 (0.00)	1 (0.30)
	年長	構成遊び [15事例]	7 (0.47)	2 (0.13)	0 (0.00)	14 (0.93)

注. () 内は各場所におけるそれぞれの年齢群に観察された遊びの内容別にまとめた事例数に対する割合。

にある物の数量・配置・形状の変化として、そのような変化をもたらし得る5種類の行為カテゴリを設定し、それらに分類される具体的な行為が認められた事例をカウントした。

5種類の行為カテゴリは、遊び場に「新たなものを持ち込む」、「既にある物を組み合わせて新たに物を作る」、「既にある物を変形させて新たに別の物を作る」、「既にある物の配置を変更する」、「活動の場に既にある物を取り除く」であった。おうちとつみきコーナーのそれぞれにおいて、上述の各種の行為カテゴリに分類される行為が1回でも認められた事例の数を、2名

の評定者が独立にカウントし、その判断の一致度を確かめた。なお、2名の間で判断が分かれた事例は、両名による再確認と協議を経て分類しなおした。

結果として、まず、おうちにおける年中の遊びの事例では、全15事例のうち、遊び場に物を持ち込む行為が9事例(60.0%)に、遊び場に既にある物を組み合わせて新たに物を作る行為が6事例(40.0%)に、変形させることで新たに物を作る行為が2事例(13.3%)に、物の配置を変更する行為が14事例(93.3%)に認められ、物を取り除く行為が認められた事例はなかった。

Table 2 遊びに必要な物理的環境を構成する行為の対象となった具体物

場所	年齢群	遊びの内容	具体物の内容
おうち	年中	ごっこ・ふり遊び	食器・調理器具を模したおもちゃ(プラスチック製の皿・カップ・フォーク・スプーン・鍋・フライパン・フライ返し・玉杓子・箸・包丁・盆・弁当箱・調味料器等)/食品を模したおもちゃ(布製、プラスチック製)/水筒(こども個人の所有物)/食べ物を模した紙製の制作物/医療用器具を模したおもちゃ(プラスチック製の靴・聴診器・注射器・薬)/人形/木製の人形用ベッド(縦45cm×横30cm×高さ40cm)/プラスチック製の車のハンドルを模したおもちゃ/ハンカチ/大判の布(おおよそ130cm四方)/布団(上掛け、縦100cm×横75cm)/断熱シートの床敷き(縦90cm×横60cm)/非固定の木製の間仕切り(蝶番で連結された2面から成り、一面は高さ65cm×横幅75cm)/木製の食卓(縦55cm×横55cm×高さ30cm)/木製の作業用の机(縦60cm×横45cm×高さ35cm)/プラスチック製の食卓(縦60cm×横40cm×高さ45cm)/木製の椅子(縦30cm×横30cm×高さ24cm、背もたれ部分20cm)/プラスチック製の大スツール(高さ35cm×直径25cm)/プラスチック製の小スツール(高さ15cm×直径25cm)/木製の箱(おおよそ20cm四方)/プラスチック製のカゴ(縦40cm×横30cm×高さ18cm)/プラスチック製の衣裳ケース(縦40cm×横35cm×高さ17cm)/紙製の菓子・ティッシュ等の空き箱/木製の板(縦55cm×横40cm)/発泡スチロールの板(縦30cm×横18cm)/折り紙
		会話	プラスチック製の食卓(縦60cm×横40cm×高さ45cm)/プラスチック製の大スツール(高さ35cm×直径25cm)
		その他	—
つみきコーナー	年長	ごっこ・ふり遊び	食器・調理器具を模したおもちゃ(プラスチック製の皿・小鉢・カップ・鍋・フライパン・玉杓子・箸・ボウル・ヘラ)/食品を模したおもちゃ(布製)/人形/木製の人形用ベッド(縦45cm×横30cm×高さ40cm)/木製の食卓(縦60cm×横60cm×高さ35cm)/プラスチック製の食卓(縦60cm×横40cm×高さ45cm)/ハンカチ/布団(幼児用)/非固定のおもちゃを収める棚(横幅80cm×奥行30cm×高さ60cm)/非固定の木製の間仕切り(蝶番で連結された2面から成り、一面は高さ65cm×横幅75cm)/絵本/卓上ゲーム用のカード/鉛筆/折り紙/画用紙の切れ端
	年中	構成遊び	積み木の入った木製の大箱(縦40cm×横40cm×高さ10cm)/積み木の入った木製の中箱(縦35cm×横25cm×高さ10cm)/プラレールセットの入った木製の箱(縦40cm×横30cm×高さ20cm)/積み木の入ったプラスチック製の箱(縦35cm×横28cm×高さ12cm)/カラー積み木と木製人形の入ったプラスチック製のカゴ(縦28cm×横20cm×高さ15cm)
つみきコーナー	年中	ごっこ・ふり遊び	積み木の入った木製の箱(縦40cm×横40cm×高さ10cm)
	年長	構成遊び	積み木の入った木製の箱(縦40cm×横40cm×高さ10cm) 積み木の入った木製の中箱(縦35cm×横25cm×高さ10cm)/カラー積み木と木製人形の入ったプラスチック製のカゴ(縦28cm×横20cm×高さ25cm)/プラスチックおよび木製の箱型机(縦45cm×横45cm×高さ45cm、中は空洞で4側面中央にこどもが通過できる程度の円形の穴が開いている) 木製の椅子(長年幼児用)/保育者用スツール(縦45cm×横30cm×高さ50cm)/プラスチック製の食卓(縦60cm×横40cm×高さ45cm)/食器を模したおもちゃ(深皿・小鉢・フォーク・スプーン)/大判の布(おおよそ100cm四方)/セロハンテープカッター台/木製の板(縦85cm×横35cm)

次に、年長の遊びの事例においては全3事例のうち、物を持ち込む行為が1事例(33.3%)、配置を変更する行為が3事例全てに認められ、遊び場に既にある物を組み合わせて新たに物を作る行為・変形させることで新たに物を作る行為・物を取り除く行為が認められた事例はなかった。このとき、2名の評定者間の一致度は.76であり、基準値の.75を上回っていた。

また、つみきコーナーにおいては、年中の遊びの事例の全10事例のうち、遊び場に既にある物を組み合わせて新たに物を作る行為が2事例(20.0%)に、変形させることで物を作る行為が1事例(10.0%)に、配置を変更する行為が8事例(80.0%)に認められ、物の持ち込む行為・物を取り除く行為が認められた事例はなかった。加えて年長の活動事例においては全15事例のうち物を持ち込む行為が7事例(46.7%)に、既にある物を組み合わせて新たに物を作る行為が2事例(13.3%)に、配置を変更する行為が14事例(93.3%)に認められ、既にある物を変形させることで新たに物を作る行為・物を取り除く行為が認められた事例はなかった。このとき、2名の評定者間の一致度は.80であり.75を上回っていた。

以上をふまえ、Table 1に、確認された行為カテゴリを含む事例の数を、おうちまたはつみきコーナーでの各年齢群における遊びの内容別にまとめた。Table 1では、どの観察場所およびどの年齢群にも、物を取り除く行為が認められた事例は見られなかったことから、この行為カテゴリについては省略した。表中の()内の数字は、内容ごとにまとめた事例群の全数に対する割合を表している。このTable 1より、おうちでの年中における「その他」の遊びを除き、他の遊びでは、遊び場内にある物の数量や空間的配置、形状を変化させる行為の認められる事例が1事例以上生じたようであった。

なお、上述の、観察された各行為の対象となった具体物について、記録をもとに2名の評定者が整理したところTable 2のようにまとめられた。Table 2より、こどもによる働きかけの

対象は片手で持ち上げられる物(例としておもちゃのフォーク)から、両腕を伸ばして抱えることで持ち上げられる物(例として縦45cm×横45cm×高さ45cmの木とプラスチックでできた箱型ツール)まで、スケールは様々であった。

考察

本研究では、こどもにおける遊び場の物理的環境を構成する試みに焦点を当て、遊びに必要な環境をつくる際の具体的な行為にどのようなものがあり、またそれらの行為にはどのような特徴が見出されるのかを調べるのが目的であった。

保育室内で他の場所とは区別された空間である別所(仙田,1995)にあたるおうちとつみきコーナーという遊び場に注目したところ、そこで観察された遊びの事例数と主な種類は次のようにまとめることができた。すなわち、おうちにおいて見られた遊びは年中で15事例、年長で3事例であり、年中(86.7%)と年長(100%)ともにごっこ・ふり遊びが主であった。また、つみきコーナーにおいて見られた遊びは年中で10事例、年長で15事例であり、年中(80.0%)と年長(100%)ともに構成遊びが主であった。

主な遊びとして、おうちではごっこ・ふり遊びが、つみきコーナーでは構成遊びが認められたのは、それぞれの場所が各遊びに関連する物品をあらかじめ備えていたことによる影響と考えられる。横山(1999)は、自由遊び時の保育室内におけるこどもの行動を調べ、生活や遊びの拠点として整備された空間で発生する行為(遊びを含む)が、その空間の「囲われ度」よりも付属する備品の内容に左右されると報告した。この報告をふまえたとき、本研究のおうちには日常の生活用品を模したおもちゃが、また、つみきコーナーの側には積み木やブロックの入った箱が置かれており、それらがこどもの活動の手がかりとして作用し、各場所で特定の遊びが目立って生じることとなったのであろう。

このような、おうちとつみきコーナーで観察された遊びの事例には、各遊び場の物理的環境

をつくるための行為が認められた。Table1を参照すると、その行為は一種類ではなく、年中・年長とも、遊び場にある物の数量や形状に変化をもたらす数種のカテゴリに分類可能であった。分類された行為の中でも最も多くの事例で確認されたのは、既にその場にある物の配置のみを変更させる行為であった。Table 1を見るに、その割合は、おうちとつみきコーナーでの事例を合わせた全43事例のうちの39事例であることから、9割(90.7%)にのぼる。

配置変更という行為が年齢や活動内容に左右されず、最も多くの事例でみられた点を考えるにあたって、物の配置換えが行われたおうちとつみきコーナーは、限られた空間であったことに注目したい。つまり、広さに制限のある場所では、物の位置・方向を新たに定めて置き直す過程で、その物に関わって広範囲を移動する必要がなく、また新たな位置・方向に物を置き直す際の身体的エネルギーも少なく済んだ可能性がある。場合によっては、参加者が座位のままでも、目標の対象にリーチング(Bloch & Morange, 1997/2001)ができれば、物の配置を変えられる状況も生起し得たであろう。このように、行為者への大きな負担なく実施可能であったことが、多くの事例において配置変更が認められる要因となったのではないだろうか。

また、上述の、既存の物の配置変更という行為について多くの事例で認められたのは、遊び場に新たな物を持ち込む行為であり、Table1から考えるとその割合は43事例のうちの17事例であるので4割近く(39.5%)といえた。興味深いのは、この行為が各年齢で最も多く観察された内容の遊びに生起し、年中ではおうちにおけるごっこ・ふり遊びの8事例に、年長ではつみきコーナーにおける構成遊びの7事例に認められている点である。

そこで、ごっこ・ふり遊びと構成遊びについて見てみると、これらは遊び手のイメージが関与する活動であり、こどもに現実世界とは別に豊かなこころの世界を持つことを可能にする表象・象徴の発達と関連が深いとされている。そ

して、表象は現実の事物を「今、ここ」から切り離して心の中に再現させたものであり(木村, 2008), Piagetによれば1歳半から獲得され、象徴はある物を別の物のシンボルとして扱うことを可能にするものであり(木村, 2008), 加用(2011)によれば「ウソッコ(～のつもり)」が理解可能になる4歳辺りから獲得されるという。

以上をふまえて本研究の参加者の平均年齢を見てみると、年中児は約5歳、年長児は約6歳であった。つまり、両年齢群のこどもたちは、すでに表象機能・象徴機能に支えられる内的世界を有する段階にあったといえよう。そして、彼らは自分たちの内的世界を納得いくように表現したり、他者と共有して活動を進めたりしようとする時、その場にある物のみを材料として使うのでは不十分さを感じるが多々あったのではないだろうか。このことが、遊び場に外から新たな物を持ち込むという行為を4割近く生起させるに至ったと推察される。

こういった物の配置変更と持ち込みという2種類の行為に加え、本研究では、その場にある物を組み合わせて新たに物を作る行為が全43事例のうちで10事例(23.3%)に、物を変形させて新たに別の物を作る行為が3事例(6.9%)に認められた。Table1にもまとめた以上4種類の行為に対して、活動の開始時にその場にあった物を取り除く行為はいずれの事例にも認められなかった。

物を取り除くことなく、空間的に制限のある場所内に様々な方向で様々な形態の物を配置したり、新たに物を増やしたりすることは、その場所の物理的な広がりやうばうことになると考えられる。そして、そのような物理的広さのない場所では行動が制約を受けるために、遊びにくさが感じられよう推察されるが、それでも参加者には遊び場にある個々の対象の数を減らす様子は見受けられなかった。

こういった状況に関わって、Kaplan, Kaplan, & Ryan(1988/2009)は、人は物理的には広大とは言えなくても、空間的な広がりや感覚をもたらす場所を別世界とみなして魅力的に感じるこ

とがあると述べている。これはその空間の実際の広さよりも「感じられる広さ」の方が、空間の評価にあたっては重要であるということを示している。また, Kaplan et al. (1988/2009) は、人は囲まれる感覚に安心感を抱くとも述べており、これは、その場に物が多いためからといって必ずしも居心地の良さが損なわれるわけではないこと示しているといえるだろう。

上述を総合して考えたとき、おうちとつみきコーナーは、物が様々に配置されたり、ときに新たに持ち込まれたりしたことで、物理的には狭かったかもしれない。しかし、参加者である子ども自身はその狭さを感じず、むしろ、物に囲まれることによる安心感を得ていたことで、遊び場から物を取り除く行為を示さなかったのではないだろうか。

ここまで言及してきた、遊びに必要な物理的環境を構成する行為の対象となった具体物に目を向けると、幼児期の子どもがおとなの手を借りなくてもある程度移動可能な大きさと重さの対象に集中しているように思われた (Table 2)。人の対物行動には、これまでの物と関わる経験・物にまつわる経験からの学習に加えて (山田, 2007), 様々な物を含む環境が提供する行為の可能性 (佐々木, 2008) をどう知覚するかも影響すると考えられている。これをふまえれば、本研究における行為の対象となる物の偏りにも、子どもの園での生活経験に加え、物が持つ行為の可能性への知覚のあり方が現れていると推察されるだろう。

以上をまとめると、本研究では、保育室内にある区画化された特定の場所における幼児期の子どもの遊びを観察し、彼らが自分たちの遊びに必要な物理的環境を構成するための具体的行為として、遊び場にある物の配置を変えたり、新たな物を持ち込んだり、組み合わせや変形によって新たな物を作ったりすることを見出した。また、そのような行為の対象となるのは、子どもが自分たちの力で扱える範囲の具体物であった。今後の研究では、観察場所の規模や数、参加者の年齢範囲を広げてデータを収集するこ

とで多側面からの分析を行い、子どもによる遊び場の物理的環境を構成する行為における特徴について、より明確に示していきたい。

文献

- 赤坂 榮. (2014). 保育室. 森上史郎・柏女霊峰 (編), 保育用語辞典: こどもと保育を見つけるキーワード (p.151). 京都: ミネルヴァ書房.
- Bloch, H. & Morange, F. (2001). 外界の空間での身振りの体制化: 定位とリーチング. 竹内謙彰・旦直子 (監訳), 空間認知ハンドブック (pp.25-48). 大阪: 二瓶社. (Foreman, N., & Gillet, R. (Eds.). (1997). Handbook of Spatial Research Paradigms And Methodologies. London: Psychology Press)
- Butterworth, G. & Harris, M. (1997). 発達心理学の基本を学ぶ: 人間発達の生物学的・文化的基盤. 村井潤一 (監訳), 小山正・神土陽子・松下淑 (共訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Butterworth, G. & Harris, M. (1994). Principles of Developmental Psychology. England: Lawrence Erlbaum Associates)
- Huttenlocher, J., & Vasilyeva, M. (2003). How toddlers represent enclosed spaces. Cognitive Science, 27, 749- 766.
- Kaplan, R., Kaplan, S., & Ryan, L. R. (2009). 自然をデザインする: 環境心理学からのアプローチ. 羽生和紀 (監訳), 中田美綾・芝田征司・羽田倫子 (共訳). 東京: 誠信書房. (Kaplan, R., Kaplan, S., & Ryan, L. R. (1988). With People In Mind: Design and Management of Everyday Nature. Washington, D. C.: Island Press)
- 加用文男. (2011). 第3章表象世界の多様性. 木下孝司・加用文男・加藤義信 (編), 心的世界のゆらぎと発達: 表象発達をめぐる不思議 (pp.85-115). 京都: ミネルヴァ書房.
- 木村美奈子. (2008). 第4章表象機能の発生と発達: 世界の二重化の始まり. 加藤義信 (編), 資料で分かる認知発達心理学 (pp.60-75).

- 東京：ひとなる書房。
- 北浦かほる. (1999). プライバシー. 日本建築学会 (編), 建築人間工学事典 (pp.67-68). 東京: 彰国社.
- 南 博文. (1993). 33. 幼児の行動観察. 利島保・生和秀敏 (編著). 心理学のための実験マニュアル: 入門から基礎・発展へ (pp.192-197). 京都: 北大路書房.
- 三島正英・山下由紀恵. (1995). 1章 そだつ: 乳児の空間認知. 空間認知の発達研究会 (編), 空間に生きる: 空間認知の発達研究 (pp.12-39). 東京: 北大路書房.
- 宮原洋一. (2012). きのおのつづき: 環境にかける保育の日々. 東京: 新評論.
- 森上史郎・柏女霊峰 (編). (2014). 保育用語辞典: こどもと保育を見つめるキーワード. 京都: ミネルヴァ書房.
- 無藤 隆. (2012). 保育実践と保育環境. 保育学研究, 50, 4-7.
- 佐々木正人. (2008). アフォーダンス入門: 知性はどこに生まれるか. 東京: 講談社学術文庫.
- 塩美佐枝・新澤誠治・小林研介. (2001). 保育環境プランニングブック 2: 3・4・5歳の保育環境. 東京: チャイルド社.
- 汐見稔幸・村上博文・松永静子・保坂佳一・志村洋子. (2012). 乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容. 保育学研究, 50, 64-74.
- 砂上史子. (2007). 第2章 こどもの育ちと領域「環境」. 無藤隆 (監), 福元真由美 (編). 事例で学ぶ保育内容: 領域環境 (pp.35-48). 東京: 萌林書林.
- 仙田 満. (1995). 8章 あそぶ: 遊びの行動と空間. 空間認知の発達研究会 (編), 空間に生きる: 空間認知の発達研究 (pp.152-171). 東京: 北大路書房.
- 植原 清 (編著). (2012). 2013年度版役立つ保育・教育用語集. 大阪: 大阪教育出版.
- 山田恵美. (2012). 幼児の活動展開を支える保育環境: 絵本コーナー内の場と読み方. 保育学研究, 50, 29-41.
- 山田有希子. (2007). 第4章 ものや道具にかかわって遊ぶ. 無藤隆 (監), 福元真由美 (編). 事例で学ぶ保育内容: 領域環境 (pp.73-100). 東京: 萌林書林.
- 横山 勉. (1999). 多様と空間に見る保育所の空間構成に関する研究: (6) 保育室内外のコーナー (保育空間) について. 日本建築学会北陸支部研究報告書第42号, 295-298.
- 渡辺のゆり. (2012). 0-5歳児たてわり保育の環境構成. 日本保育学会第65回大会発表要旨集, 668. 東京: 東京家政大学.

本研究にご協力いただきました幼稚園のこどもたち, 先生方, 保護者の方に厚くお礼申し上げます。

本研究は平成24-25年度科学研究費助成(若手研究(B), 課題番号24700794)を受けました。

The environment construction of the play space by young children

Abstract

The purpose of this study was to investigate how preschool children constructed physical environment in order to make the play space appropriate for them. In this study, four-year-olds and five-year-olds were observed when they were playing at the specific places in kindergarten class rooms. As a result, it was found that the children changed the stuff's arrangement, brought new ones in, and made something new by combining and remodeling of existing stuffs during their play. On the other hand, they did not try to get rid of something unnecessary for their activities. Additionally, the children dealt with objects which were neither too large nor too heavy for them. The result of present study suggested that preschool children tended to turn the physical environment of their play space more abundant and complicated with various potable stuffs as needed.